レンタルチートでリリカル世界をエロで支配する

ハニワ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｒ１８とＲ１５の間ってどのラインなんだろう。

どこまでやっていいんだろう。

そんな疑問から生まれた作品です。

テンプレートな神様転生を経てリリカルなのはの世界にやってきたキモオタの青年は、案の定チートを使って美少女達にセクハラを敢行する。

この世の素晴らしき真理を悟り。

今日も男は――

【なのはのおっぱいを揉んだり】

【はやての尻を揉んだり】

【フェイトに〇〇をぶっかけたり】

――と変態行動でミッドチルダを騒がせ、今日も牢にぶち込まれるのであった。

ＩＱがゴリゴリ下がる作品です。

ストーリー？　そんなものない。

クズの中のクズ主人公にリリカルキャラがエロい目に合わされるのでご注意を。

目　次

プロローグ ―――――――――――――― 1
一話：強制脱衣は男のロマン ―――――――――― 6
二話：機動六課パニック（触手もあるよ！） ―――――――― 23
三話：暴走列車の中でＴｏＬＯＶＥる発生（前編） ―――――――― 38

プロローグ

☆

男「あれ？　ここはどこだ？　俺は確か部屋で（略」
神様「うむ。ようやく起きたか」
男「じ、じいさん？　あんたは一体？　ここは（略」
神様「うむ。神様じゃ。お主は死んだのだ。本来ならお主は地獄行きなのじゃが、お主で丁度〇〇人目の死人でな。サービスの心で第二の生を与えてあげようかと思ったのじゃ」
男「マジっすか、神様⁉　さすかみ！　ちなみに自分はどんな死に方を？」
神様「うむ。記憶が錯乱しとるようじゃのう。生前のお主は猿より性欲を抑えきれぬ変態でな。道行くＯＬの乳を揉むわ。女子高生を痴漢してその尻にチンコ擦り付けるわ。小学生のスカートの中を盗撮するわ」
神様「うむ。しまいには投獄されて性欲を発散できず憤死したのじゃ」
男「えぇ……（困惑）。そんな奴に転生チャレンジ与えていいの？」
神様「うむ。お前の好きな『リリカルなのは』の世界で余生を過ごすとよい。過ごしやすいように『特典』も与えておいた」
男「ヒャーッ！　なんだか知らんが性春を謳歌するチャンスだー！　行ってきまーす！」
神様「うむ。では行ってこい」
男「サンキュー、神様！　長生きしろよー！」

ピョン

神様「……」
神様「はて。ワシは何をしとったんじゃったっけ？」
天使「いたいた。神様ってばお仕事中にこんなところに抜け出してしまわれて」

神様「天使さんや。今日の朝ごはんはまだかのう？」
天使「もう……朝ごはんはさっき食べたばかりでしょう？　早く仕事に戻らないと」
天使「次の仕事は『憤死した性犯罪者を過酷な地獄』に送る仕事ですよー」
神様「うむ。サービスじゃな？」
天使「……おいたわしや。神様、ボケが進行していらっしゃる」
神様「うむ。では行ってこい」

☆

焦りすぎたか。
無謀すぎたか。
堪えきれなかったか。
俺は嘆息して、足を止めた。
目の前は行き止まりの壁が反り立っている。恐らく逃げ着いたのではなく、ここに誘導されたのだろう。この建物は機動六課の隊舎。地の利は向こうにあった。がむしゃらの逃走など通用するわけもなく。
もはやこれ以上逃げ回ることは不可能であろう。
そもそも無理だったのだ。荷物を片手に彼女の追跡を逃げ切ることなど。
己の背後に迫る怒涛のような魔力の渦に、思わず喉を鳴らしながら男は後ろへと振り返った。
時空管理局、本局武装隊所属。
現機動六課、『スターズ』分隊隊長。
管理局のエース・オブ・エース。
高町なのは、一等空尉。

正にその女性が、無表情で俺の背後に佇んでいた。
まるで内に眠る怒気を表に表さぬように無理矢理抑え込んでるかのような顔で。

「――やっと追い詰めたよ。犯罪者さん」
「……高町、なのはさん」

純白のロングコートを身に纏った女性――高町なのはの平坦とした宣言が犯罪者と呼ばれた俺の背にかけられた。
その声色から察せられる感情は恐ろしいほど冷静で、冷徹に感じられるほど冷たい。
それは普段は温厚な彼女を知ってる人間が聞けば間違いなく我が耳を疑うだろう。そして口を揃えてこう言うはずだ。
――彼女がここまで怒るとは何事だ?、と。

「レイジングハート」
『ーーＡｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ』

――アレを撃つ気だ。建物内で。俺を潰す気だ。
愛機の名前を囁いて、その杖の切っ先をこちらに向けてきた。
同時に桜色のエネルギーが先端に収束し始め、施設内の廊下が力の余波で吹きすさぶ。
ひりつくような熱をビリビリと感じて背中から冷たい冷や汗が流れ、本能的な恐怖から一歩、また一歩と退いてしまう。

「見逃してはくれないかい?」
「あなたは大きな罪を犯しました。時空管理局の法に則り、あなたを拘束します。しかしあなたにも弁護の機会はあります」
「……」
「その右手に握ったモノをその場で下ろして、然るべき人に謝罪し、武装を解除して投降すれば悪いようには――『断るっっ!』」

ピキッ、と彼女の額に怒りの筋が走る。
だがそんなものは知ったことではないと俺の目は雄弁に語っていることだろう。
――断固としてそれだけは譲らない、と。
――この手に握った温もりだけは離さない。
俺はそう心に誓っていたのだ。
例え神であってもこの右手を開かせることは容易ではない。
彼女は小さく息を吐いて、臨界点まで高まりかけた怒りを抑える
「そうですか♪」とさっきまでの無表情から一転してとびきりの笑顔を見せてくれた。
その代わりレイジングハートを握り込んでいる箇所からビキビキとヤバそう音が響き渡る。
どんなふざけた握力してるんだこの人……普通に引いた。

「わかりました、はい、警告を無視されたので撃ちますね、もう限界なので撃ちますね、非殺傷なのでブラスターモードで撃っても大丈夫ですよね、大丈夫です、はい、許可します私」
【アカンアカン！　なのはちゃん、それはヤバイって！　隊舎の壁に穴が空くって！　ただでさえ予算スカスカの貧乏部隊なんやから加減はしてーな！】
「――ブラスター、３!!」

突然割り込んできた謎の関西弁の女性の音声が聞くに耐えない悲鳴に変わった瞬間、桜色の閃光が一際大きく輝いた。
ガションガションと『カートリッジ』の薬莢が排出口から一つ二つ飛び出して、それが繰り返される度に高町なのはの内在魔力が膨らんでいく。
どう見てもオーバーキルです。殺す気かな？
半ば諦めの境地に至った。

「これが本当に最後の警告です！　投降してください！　そうしてくれれば痛い目見ずに済むことを約束します！　今の私の指はとても軽いので、いつトリガーが引かれてもおかしくありません！」
「ほ、本当に……投降したら助けてくれるのか？」
「ええ！　助けます。助けますからそれを――」

「――フェイトちゃんのブラジャーとパンツを返しなさい!!!」
「だが断る」

「――エクセリオン・バスターァあああああ！」
「ぎゃあああああああああああああああああああ！」

その日。
機動六課の隊舎の壁に大穴がくり抜かれた。
隊員曰く、「審判のラッパが頭に鳴り響いた」「白い悪魔がご降臨なされた」「頭冷やされた時より怒ってました……」と。
そう言わしめるほど絶大な魔力の余波が周囲にまで拡散したらしい。

「これで取り戻せるよ、フェイトちゃんの下着。変態さん……かなり頭、冷やそうか」

地に伏してもなお美少女の下着達から手を離さぬ男（俺）をまるでゴミを見るような冷たい瞳で見下す管理局のエースオブエース。
その熱意と根性を何故正しいことに活かせないのかと、高町なのは悲しくなったのであった。

一話：強制脱衣は男のロマン

☆『惨劇』より数時間前☆

「ほらほら。エリオ、キャロ。もっと俯瞰的に自分の動きを把握しないと簡単に回り込まれちゃうよ？　エリオは常に移動し続けて動きを読まれないようにね」
「す、すごい！　さすがフェイトさん！」
「わー、フェイトさんカッコいいです！」

金色に揺れる美髪を揺らしながら『フェイトさん』と呼ばれた女性が、子供達に己の動きを見本として見せているようだ。
その空戦軌道は精密で、しなやかで、速い。
……いや注目するのはそんなところではなかった。本当に注目すべきところは。

「あの美しいパツキン美女は間違いなく『リリカルなのは』の『フェイト・テスタロッサ』ちゃんだッッ！　生フェイトちゃんをこの目で見れるなんて、生きててよかった～！　いや死んだんだけどさ！」

背骨が悲鳴を上げるのも無視して渾身のイナバウアーのポーズで歓喜を示す。
まさか本当にアニメの世界に転生出来るとは思ってもみなかったから。
しかも目の前にフェイトちゃんは訓練の最中らしく空を旋回中。超ミニのスカートがマント共に風で揺れ、そのむっちりとした肉付きのいい太ももと黒ソックスが合わさって絶対領域のエロさをさらに強く醸し出している。
いますぐ彼女の足の間に滑り込んでスカートの中の秘境を確認してえ。
この草木の陰からいますぐ駆け出したい衝動に駆られるが、わずか

に残る薄い理性によって足を止める。

「お、落ち着け俺！　冷静になれ！　ただ突貫して本当に上手く行くのだろうか？」

①生フェイトさんだー！　パンツ見せてー！
②フェイトさんのスカートを捲ろうとする。
③フェ『サンダー・レイジ！』　俺『あんぎゃあ』
④再収監――懲役刑。
⑤本編終了まで監獄の中で生きることに。
⑤レンタルチートでキモオタは（ｒｙ――完結

はい。ダメそうですね。作戦破綻。

ていうか今の彼女は空をびゅんびゅん飛んでらっしゃるし、真下まで行ってスカートの中を覗くにしたってそこに着くまでに移動されたらもう終わりだ。

ていうかこれ作戦と言えるほど緻密な策でもねえや。小学生でももっとマシな作戦思いつくんじゃねーかな。

初っ端から挫けてしまった。

せっかくこの世界に転生しても、あの子達にセクハラ出来ないなら意味がないじゃないか。

目の前の極上の皿があるというのにヨダレを垂らして舌なめずりしか出来ないというなら今すぐ腹を切って再転生を期待したほうがずっとマシだ。

ていうか神様。特典とか言ってたわりには何も変わったことが見えないんですが。

「……うん？　何かポケットに入ってる？　――ああ、なんだスマホか」

手癖でついつい後ろポケットからスマートフォンを取り出してし

まった。
でもおかしいな。
確か自分は刑務所にぶち込まれた時にスマホの類は没収されたはずだが……そういえば今の自分は刑務服でなく普段から来ていた地味な私服を纏っている。
……え？　特典ってまさかこれのこと？

「もっとマシなサービスないんかい！」

結局特典とやらも打開策になりそうもなく、このやり場のない怒りをどこにぶつけてくれようかとスマホを電源起動させる。
しょうがない。
スマホに保存してるフェイトさんのえっちな画像でも見て落ち着くか。
バッテリーは幸い【１００％】だし長く閲覧しても問題は――。

「ふんふーん……、ってあぎゃあ!?　カメラロールに何も残ってねえ!?　リセットされてやがる！　嘘だろ神様ァ！　俺の今までのエロ画像収集時間を返せぇ！」

膝が折れて、地面に崩れ落ちる。
もう泣きたい。

「……なんぞ、このアプリ。こんなのインストールしてなかったよな？」

絶望してスマホを叩き割ってやろうと振りかぶった瞬間、視界の隅に妙なモノを捉えた。身に覚えのないアプリが画面内に存在してたのである。

「なんだこれ。ドクロのマークがついてる。背景が真っ赤だし、ジャ

ンルはホラーかな？　気味が悪い……。まさか本当の特典はこれのことかな？」

画面に吸い寄せられるように、指で謎のアプリにタッチしてみた。すると画面が強い光を発し、生きた心臓を握ってるのかのようにスマホがドクンと脈動した。通常ローディングではないと一発でわかるほどの異常に思わず目を瞑りかけたが、次第に発光が収まり再び画面を覗くと『謎の一覧』が表示されていた。

【特典能力・武器の一覧になります】
【一度で複数のレンタルが可能です】
【レンタル中はバッテリーを消費します】
Ａ：総魔力量『ＳＳＳ』～『Ｄ』
Ｂ：近接技能『ＳＳＳ』～『Ｄ』
Ｃ：魔力出力『ＳＳＳ』～『Ｄ』
Ｄ：デバイス精度『最上位』～『下位』
Ｅ：アビリティ――『インビジブル』
Ｆ：アビリティ――『転送』
Ｇ：アビリティ――『分解』
Ｈ：アビリティ――『固定』
〃　〃

「……サンキュー、神様ッッッ！」

この羅列された文字列を理解するまで数秒もかからなかった。
素晴らしいことしか書いてないじゃないか！
これはつまり、タッチで『レンタル』してしまえばその能力を得られる。素直にそう解釈してもいいはずだ。バッテリーというのはスマホの電池のことなんだろう。恐らく【０％】になったら使えなくな

ると予想される。そこは注意さえしてれば大したデメリットではない。

「ひゃー！　もう我慢できねえ！　押すねッ！」

細かい理屈などもはやどうでもいい。

衝動に身を任せ、片っ端から面白そうなのを上からタッチし続けていく。

☆

「それでは今日の訓練は終わりです。お疲れ様。もう休憩に行ってもいいよ、二人とも」

「はい！　ご指導ありがとうございました！」

「ふふ。どういたしまして。しっかりシャワーを浴びて有事の際までロビーで待機してててね」

――これで邪魔者は消えた。

エリオとキャロが機動六課の隊舎へと仲良く走り去っていく。

その表情はほころんでいて、憧れであり親当然のフェイトちゃんと訓練できて嬉しかったのだろう。

だけど悲しいかな。その憧れのフェイトさんはいまからとんでもない目に遭います！（遭わせます！）

「さすがに子共二人の前であられもないことをするのは気がひけるからな……キャロちゃんには今度パンツを頂く予定だけど」

じゃあ、やるか！　エロの宴を！

二人の背中が見えなくなった瞬間――俺は【最上位・デバイス】を起動させて行動に移した。

デバイスの形状は『銃型』であり、リンカーコアを初めて起動させた不慣れな自分がマスターにも関わらず滑らかなプログラム動作が脳内を走ってるのがわかる。

「……！　誰っ!?　あなた、そんなところで何を」

「――――私です！」

さすがSランクというべきか。

フェイトちゃんの背後に突然出現した自分に対し、彼女は瞬時にデバイスを起動。一瞬で例のえちえち防護服に換装された。片手に握られた斧槍はしっかりとこちらに向けられていて……正直超怖いです。

だがそうでなくては面白くない。

ジリジリ、と草木を間に互いを視線で牽制する。

「ここは機動六課の敷地内です！　関係者であるなら今すぐ身分証の提示を！　提示出来ないのであれば規則に則りあなたを拘束します！」

「身分証……なるほど身分証提示すればいいんだね？」

「……？　はい。そして武装の解除と質問が幾つ……か。いく……――って!?」

「これが俺の身分証（男の証）さ!!!」

「あ、あなた何を脱いでるんですか!?」

おもむろにベルトを外し、ズボンを脱ぎ捨て下半身のレイジングハート（意味深）を露出した。

さらにグッと腰に手を当てて彼女に見せつけるように、だ。

変態の奇行を目にしたフェイトちゃんはその頬を真っ赤に染め、恥ずかしそうに顔を逸らし後ろへ飛び退くように距離を取った。それでも武器を下ろさずこちらを牽制し続け、目線を完全に切らない彼女の強いプロ意識に敬服せざる得ない。
恥ずかしがる女の子、いいよね。
ていうか。

「フェイトちゃんだって本気出す時は服脱ぐジャンッッ！　痴女スタイルになるんでしょ？　それと同じ理屈さ！」
「ち、痴女なんかじゃありません！　私のは装甲を減らして機動力をより鋭くする為のもので……！」
「ひゃー！　あまりに隙だらけだから撃っちゃうぜー！　バキューンバキューン！」

右手のハンドガン型デバイスが火を吹いた。
どうやら【総魔力量・ＳＳＳ】のおかげか動体視力まで異常に高まっているようだ。メガネの比じゃないほど視界が超クリア。
トリガーを引かれて放たれた弾丸は空気抵抗を一切受けてないのではないか、と思われるほど螺旋の軌跡を描いて標的を射抜かんとする。

「……こんなものっ！」
【――ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ】
「おっ、やるねェ」

しまった！　とフェイトちゃんの瞳に焦りが見えたが即座に反応してきた。セクシーコマンドーで不意を突き、ＳＳＳ相当の技術で抜き撃ちするも彼女は食らいつく。
フェイトちゃんの超人的な反射神経と『愛機バルディッシュ』の思考同期速度は素晴らしく、弾丸が己に到達する前に物理障壁を間に挟むように展開する。天性の才を持つものがさらに地道な努力を重ね

た結果だろう、チートパワーの自分より『速度』という面では上かもしれない。

「だけど悲しいなぁ。受け止めるんじゃなくて、無理してでも回避すべきだったよ」

「ぐっ……!? この弾丸、重い！ どれほどの魔力を注ぎ込んでいるの！」

「ぐへへ。ＳＳＳの魔力量で、ＳＳＳの出力ですぜ！」

「そんなのありえな――うぅ、保たないっ」

せめてもの抵抗なのか、さらに幾重の障壁を重ねるように貼り続けるがそんなもの俺にとっては障子で銃撃から身を守ろうとしてるようなものだ。

びきびき、とガラスに亀裂が走るかのようにヒビ割れていく。撃ち込まれた弾丸は火勢の勢いを保ったまま何重ものプロテクションを抉り続け――遂に防御は全壊し、フェイトちゃんの胸に弾丸が突き刺さった。

「みんな、ごめんなさい……。なのは」

弾丸に込められた異常な魔力量がそのまま直撃し、死を覚悟したのか。

フェイトちゃんは虚空に向かって謝罪した。

ゆらりと膝から力が抜けていき、地面に崩れ落ちる。

それと同時に――。

「……あれ？ 痛く、ない？」

バチンっ！、とバリアジャケットが吹っ飛んだ。

正確に言えばバリアジャケット『だけ』が。

もっとより正確に伝えると。

「うひゃあ、たまんねえ！　フェイトちゃんの爆乳生おっぱいだあああああああああああ！」
「――――!!?　き、きゃあああああああ!?」

フェイトちゃんの服がバラバラに分解されてその豊満なバストがタプンと音を立てて剥き出しになってたのである。当然先っぽの可愛らしい苺もチラリと見えたし、防護マントの下に着用していたレオダード・スカートも溶け崩れて――。
素晴らしい……、生きててよかった。
いや一度死んでるんだけどさ。

「～～っ!?　こんな！　こんなことって!?」

本能的に身を守ろうと右手でおっぱいを、左手で下半身を隠そうとするも二つの巨大なメロンは女性の手で隠しきれるものではなく。むしろ手に押し付けられたことによってむにゅむにゅっ、と押しつぶされておっぱいの形が変わる様はエロ以外の何者でもない。
横乳、下乳も素晴らしく絹のような白い肌とむっちりとした肉付きのコラボレーションが俺の欲望を煽り立ててくる。
目の前の光景を脳内海馬に焼き付けるべくＳＳＳチートをフル稼働。カシャカシャカシャ、と瞳のシャッターを切り続けコマ送りレベルでフェイトちゃんのおっぱいと下のデリケートゾーンを保存する。
ホンマ、眼福やで。

「な、なんでぇ……!?」
「説明しよう!!　レンタルしたアビリティに『分解』という項目がありそれに目をつけたのである！　分解＋服＝強制脱衣になるのは男な

らば当然の思考である！　しかも分解箇所を選べる優れもの！　女の子の綺麗な肌を一切傷つけることなく裸に剥ける男の夢である！」
「へ、変態っ！　痴漢！　最低です！」
「そんなこと言われても興奮するだけですぜ？」
「ひっ!?　お、おっきくなってる……」

股間のレイジングハートがムクムクとエクセリオンッッ！する過程を目にしたフェイトちゃんは青ざめながら俺から距離を取ろうとする。
怯える美少女と下半身丸出しのキモオタ……完全に絵面が犯罪です。本当にありがとうございます。

「わ、私に何をする気ですか？　私の仲間たちはそろそろ異常に気づいて五分もせずに駆けつけてくるはずです」
いくらあなたでも分が悪いですよ！と鋭い瞳で警告してくるが、もはや小動物が肩を震わせながら威嚇してるようにしか見えない。
それに残念ながら既に対策済みなんだなー、

「何する気かって、それはもうアレですよ。Ｒ１８への挑戦です。こんな金髪美少女の生おっぱいを見たら男なんてやることは一つだぜ！　そんなに豊かに育っちゃって……恥ずかしくないんですか!?」
「好きで大きくなったわけじゃ……」
「世の中の男性を惑わすそのおっぱいには、お仕置きが必要のようだなー。ふひひ」
「！　その嫌らしい手つきはなんですか!?」

ワキワキと指をやらしく動かしながら一糸纏わぬフェイトちゃんへと一歩一歩踏み込んでいく。
彼女はこれから起こる惨劇を予想したのか。仲間が来るまでのせめてもの抵抗なのか。一瞬だけ逡巡するも、覚悟を決めた様子で身体を隠していた腕を解き男らしくバルディッシュをサンライズ立ちで

構える。
全裸の彼女がそんなことすれば必然的にあれやこれやが丸見えになるわけで。
「うひょー！　素晴らしいプロポーションだ！」
「甘く見ないでください！　これでも機動六課所属、ライトニング部隊の隊長です！　は、裸を見られるくらいなんでもありません！」

羞恥に染まる頬で戦闘体制へ再度移行する。
周囲に魔力スフィアの弾殻が俺を囲むように展開されていく。雷の紫電がバチバチと音を響かせて鼓膜がちょっと痛い。　どうやら今度こそ本気の本気なようだ。
彼女の射抜くような鋭い瞳を見る限り、さっきのセクシーコマンドはもう通用しないだろう。正面から戦うしかないかー。

「私は絶対に負けない！　あなたがどれだけ強くても、管理局員として……女性として。あなたのような変態には負けられないんだ！」
「じゃあもしも俺がフェイトちゃんに勝ったら戦利品としてブラジャーとパンツを貰おうかなー？」
「!?」
「ついでにさっき見かけたキャロちゃんにもエッチなことしてみよう！　フェイトちゃんとキャロちゃんは親子だし下着の柄が似てるかチェックしてあげるよ！」
「……クズめっ！　檻の中で反省しろ！」

怒声を上げると共に弾丸が掃射される。
雷の弾幕がうねりを上げながら、俺を押し潰さんと襲い掛かる――が、本命は彼女自身による高速機動の撹乱と大規模砲撃のようだ。掃射でこちらの視界を防ぎ、前方に集中してる隙を突く古い手だ。
だけども彼女の速度を考えると基本戦術も必殺級へと昇華する。こちらはＳＳＳ（笑）とはいえあんまり調子こいていられないな。当

たるとやっぱり痛いだろうし。

「絶対にここで止める！　手加減もしない！『トライデント・スマッシャー』！」

神速を思わせる速度で後ろに回り込んできたフェイトちゃんの左手から、三又の矛を思わせる三本の直射砲撃を撃ち放たれた。

轟雷を伴って迫るソレは並の魔導師なら消し炭になってもおかしくない破壊力を内包していて……これちゃんと『非殺傷』になってます？

「ま、今の俺には殺傷設定も非殺傷設定も大して変わらないんだけどね」

「……!?」

再び銃声が鳴り響いた。そして。

☆フェイトさん敗北後のサービス音声☆

「もみもみ、もみもみ」

「……もう、もう許してっ……ふあ♡　ひうっ♡　頭が、おかしくなっちゃう。私の胸はオモチャじゃないから！　だからそんなに揉まないでぇ！　つ、摘むのもだめーっ！」

「フェイトちゃん感度いいんだね。今の様子をエリオ達に見せつけてやりたいなぁ。先っぽはどうだろう――――はむっ。ちゅぱ、あむあむ」

「～～～～!!　～～♡」

「ちゅうちゅうちゅうちゅう」
「あ、ん……。ひっく。もう、いやぁ……」
「ぷはっ。フェイトちゃんのおっぱい最高ー。おいしー！　じゃあ次はこの爆乳で俺のレイジングハートを思いっきり挟――――」

☆音声が途切れました☆

☆

一時間後。
草むらの上でそのエッチな肢体を投げ出して倒れ伏し、体の一部がぬるぬるになってるフェイトちゃん。その瞳は蕩けきっていて、さっきまであった抵抗の気力がまるで感じられない。
少し指でフェイトちゃんの横乳をぷにぷにと撫でてみると「ふあ……！」と可愛らしい矯正を上げた。これは完全に開発されてますわ。素でこの感度ならレンタルであった【感度上昇×???】を使ってたらどうなってんだろう。

「はー。極楽極楽。よかったよフェイトちゃんのおっぱい」
「……ぁ、」
「最高峰の山と山にゴシゴシされて、挟まってたレイジングハートがスターライトブレイカーッッ！しちゃったよ！」
「……っ」

レンタルチートの【固定】の効果が消えたようだ。バリアジャケットの着装が解かれ管理局の規定制服に戻ったので、彼女から戦利品をいただくとしよう。
分解状態に加えて【固定】もしておいたからね。そうしないとせっかく全裸にしたのにバリアジャケットを一度消して再展開されたら

元どおりになってしまう。
　それはさておき、収穫ターイム。
「ふへへ。フェイトちゃんのブラジャーいただき！　うわー、やっぱりデカイな。これ何カップ？　Ｆはありそうだなー。ありがたく頂戴するとしよう！」
「い、いや……！　服の中をまさぐらないで……んんっ」
「今度はパンツを貰……おお、上下揃って黒の下着か。しかもデザインがエロいし、もしかして期待してたのかな？　ついでにパンストも貰っておこう♡」
「……みんな、なんで来てくれないの？」

　残念ながら機動六課は異常に気づいてないと思うよ。なんせフェイトちゃんの主観では一時間以上嬲られていたことになるけど、外の時間では１０分程度しか経っていないはずだからね。
　『策』とはこのことだ。レンタルチート【時間・乖離】を【最上位デバイス】にプログラムされてた『結界』に組み合わせて張っておいたからね。さすが最上位、フェイトちゃんにも気づかれてないところを見ると他のみんなも気付けないほどの隠密性だ。
　そんなこんなでフェイトちゃんの下着をゲット！
　制服の下はノーブラ、ノーパンでやらしい臭いを撒き散らすフェイト・Ｔ・ハラオウンの出来上がり！
「俺は満足だ……、ただただ満足だ――――さてテンション上がってるこの足でキャロの元へと向かうおうかな？　いや、ティアナやスバルも悪くないな」
「みんな、逃げて……――――きゃんっ!?」
「ムニムニ。またねー、フェイトちゃん」

　最後に手のひらでは収まり切らない二つのメロンを丹念に捏ねくりまわし、イチゴをコリコリしてから俺は去っていった。

非常に名残惜しいが俺には『見果てぬ夢』がある。
縁があればまた（エロいことしまくりたいので）会おうな、フェイトちゃん。

「全くリリカル世界は最高だぜー!!!」

「何が最高なのかな？　かな？」
「……オワタ」

ゆらりと真上から膨大な力を孕んだ魔力が突然発生した。全身から冷や水が流れ、呼吸が荒くなる。見上げると――白のコートをたなびかせ、まるで俺を見下すように冷たい瞳で空中を佇んでいる女性が一人。
片手で握っているのは愛機『レイジングハート』（※俺のレイジングハートのことではない）。
エースオブエース。白い悪魔。その名は。

「た、た、高町なのはだあああああああ！」
「……正直状況を把握しきれていませんが、あなたがフェイトちゃんに酷いことをしたというのはわかります。なら――」

「一管理局員として。女性として。フェイトちゃんの親友として！
あなたを許さない！　私は怒りました！　実力行使で逮捕します」

まるで業火が吹き出し、あたり一面を灰にしてしまうのではないかと錯覚してしまうほど色々超越した魔力が顕現した。量でなく質がやばいと肌で分かる。いや、量も十分やばいんだけどさ。

とにかくこのままでは危険！

「あわあわ！　レンタル！　大丈夫レンタルしてるから今の俺はこの人にだって負けないはず！　そうだ！　追加でレンタルも」

【バッテリーが０％になりました。レンタル期間は一時終了となります。バッテリー充電後、レンタルされた特典が再開されます。またのご来店をお待ちしております】

「……」

フワーっと体から抜けていく感覚が。

ＳＳＳランクの最強の魔導師→なんの取り柄もないただの変態野郎へクラスチェンジ。

オワタ。

「許して、くれませんかね？」

「……ニコ」

いい笑顔です。

そして俺は駆け出した。かのメロスのように。

ただただ走り狂った。その身の保身の為に。

「まだだ！　まだ死ねんのだ！　まだなのはさんの胸やはやての尻を揉んでないし、フェイトちゃんの胸も揉み足りない！」

「――――ディバイン・バスター!!!」

「うひゃあ!?」

そしてプロローグへ。

俺の夢【リリカル世界の美少女達に限界ギリギリのセクハラをする】は始まったばかりだ！

二話：機動六課パニック（触手もあるよ！）

☆

「それで？　フェイトちゃんの容体はどうなん？」
「幸い外傷とかはないみたい。いまはシャマル先生が看病……っていうかカウンセリングしてるよ。恥ずかしがってはいたけど心理的にもそこまで傷付いてはいないって感じかな」
「ほっ。よかったよかった。しっかしとんでもない変態もミッドチルダにおったもんやなぁ」

機動六課、隊舎内の廊下で二人の女性が共通の友人の容体について話し合っていた。
フェイトの様子が思ったよりも軽症で関西弁の女性はホッと一息つく。それは友人としての面もあるが、もう一つの部隊長としての側面から言えばフェイトはこの部隊の中核の一つであり万一にでも再起不能になられると部隊運営にも影響が生じてしまうから。

「本当に許せないよ！　フェイトちゃんにあんな……！　あ、あんなエッチなことをするなんて！　はやてちゃんもそう思うよね!?」
「もちろんや！『フェイトちゃんのたわわに実ったおっぱいを揉む わ舐めるわ挟むわで羨ましいなーちくしょー！』――なんて欠片も思ってへんで!!!」
「……」
「ほ、本当におもうてへんよ？　本当やで？」

高町なのはと関西弁で喋る女性『八神　はやて』――――古代異物管理部・現機動六課部隊長・階級は二佐。彼女は時空管理局の中でも異例の若さで出世をしている『天才魔導師』と名高い女性である。
この『レリック』対策本部である機動六課を設立したのも八神はやての手腕のもので、19という若年ですでにあらゆる方面へのコネク

ションすら完備し、『ヴォルケッリッター』という名の非才の豪傑達を率いる『夜天の主』。
特徴、女性のおっぱいが好き。
よく部下兼家族のおっぱいを後ろから揉む。

「でも彼は何者なんだろう。フェイトちゃんから聞いた話が本当なら彼は……」
「自称【ＳＳＳランク】で【希少技能】らしきものを二つは使ったらしいね。ＳＳＳなんて管理局におらんしデータベースにも載ってないから少なくとも彼は管理局員ではないはずや」
「うん。なにより私が彼を拘束した時、彼から魔力の気配なんて全く感じなかったし身体能力は一般人のそれと変わらなかったよ」
「――それでいてフェイトちゃんを正面から打倒せしめたのも事実やね」

ホンマ何者やねん……。
八神はやては唸るように天井を仰ぎ見た。
現在。変質者の男は念入りに拘束して留置所に放り込まれ大人しくしているが、楽観できる状況ではない。
はやての考察では、あの変質者の異常な『力』は恐らく時間制限付き。フェイトとの戦いがフルスペックとして彼女の戦闘時間の証言を考えるならば、そのＳＳＳランクの状態を『１０分』は持続出来ると見ている。ただ希少技能と併用していたらしいので制限時間に誤差があるかもしれないが。
希少技能の詳細については今の情報では考察不能だがまだ複数所持してる可能性も低くはないと思っていた。

「もう一つ分かることは彼の出身地は私達と同じ『地球』かもしれへんってことくらいやね」
「地球製のスマートフォンを持ってたもんね。……なんかヤだなぁ。アリサちゃん達に安否の電話しておこ」

「スマホ以外の持ち物は一文無しの手ぶらやったからなー。バッテリーが完全に切れてたから充電中　やけど。中の情報に手掛かりがあるとええな」
「それより尋も――話し合いをした方が良いと思うよ。まだ私達は彼の正体どころか名前も知らない。とにかく面と向かって話し合わないと」
（でもなのはちゃん……またフェイトちゃんのことで煽られてキレたら、尋問室の壁までぶち抜きそうやしなぁ）

さすがにそこまでじゃないにしても、冷静さを欠いていそうな彼女は同席させられない。はやては心にそう決めていた。

「ま、時間をかければそれだけ危険が増しそうやしね。いつ彼の力が戻るかわかったもんやないし、説得するにしても懐柔するにしても拘束を続けるにしても彼の処遇を早い事決めんとな」
「……」
「？　どないしたん？　いきなり黙り込んで」
「……なんだか急に胸騒ぎが。いま彼を見張ってるのは誰かな？」

――シャマルやけど。なのはちゃんが思いっきり彼をボコボコにしたから治療と監視を兼ねてな。
不安の表情に変わった友人にそう伝えようとした時、ソレは起こった。
いまのはやてには知る由はないが、今より5分ほど前にスマートフォンのバッテリーが【１００％】まで回復していたのだ。そして内部データを閲覧すべく、局員が気軽な気持ちで電源をＯＮにしてしまったことで事態は動いてしまった。
僅か五分の隙間であっても、あの男には【時間：乖離】がある。
はやてはこの五分の猶予を与えてしまったことを後悔することとなる。

【ピンポンパンポーン。管制より緊急放送です。管制より緊急放送です。機動六課隊舎内に存在する全局員に管制より通達いたします。お聞きください――――】
「……なんで部隊長の私を介してないのに緊急放送が流れんねん」
「はやてちゃん。これ、まさか……彼がなにか」
「あかん。私も猛烈に嫌な予感してきた……！」

※管制放送が流れています※

『シャマル先生の極上おっぱい最高ーっ！　フェイトちゃんのおっぱいとはまた違った味わいです！　手に収まりきらないメロンたまりません！　もみもみもみ！』
『あんっ、……！　やめてください！　そんな、牛の乳を搾るみたいに……っ。私のおっぱいからはなにも出てきませんからぁ！　乱暴にしないで……ひぐぅ!?』
『本当かなー？　それではきっちり確かめてみるとしまーす！　――はむっ！　じゅるっじゅるっ」
『?～～～っ!?』
（??声にならない悲鳴と何かが音を立てて吸われるような音声）
『??、……っ♡』
（??子供には聞かせられない矯正）
???????

『んぐっ。ぷはー。なんだなんだ出てくるじゃありませんか！　美味しかったですよ！　レンタルパワーってやっぱりすごE～』
『ああ……。な、なんで……こんなに出てくるの？　私の胸、吸われ尽くされちゃいました』

『最後にドクターシャマルを検温してみようと思います！　俺のこの温度計（意味深）をシャマル先生の二つのクラールヴィントでじっくり挟んで体温を測りましょうねー』
『はやてちゃん、助け、……あんっ!?』
『ここが天上の狭間か……うっ！』
『??』
（言葉に出来ない何かが繰り広げられている！）
※管制放送が途絶えました※

「……」
「……」
「見張り、大丈夫じゃなかったね」
「シャマルのあんな声初めて聞いたわぁ」

なんだかもう、色々すごいことが機動六課全域に放送された。隊舎内は怖いくらい静謐で満たされて、あちらこちらの空気が完全に凍りついているであろうことは想像に難くない。
そこらへんを歩いていた男性職員が前屈みになって「くっ、持病の癪が！」と戯言を呟きながら床に膝をついてる様子を二人は見てないフリをして、なのはは『レイジングハート』を。はやては『夜天の書』を防護服換装と共に無言で起動させた。

「はやてちゃん、限定解除（リミットリリース）の許可をお願いします。このまま壁をぶち抜いて管制室を直接狙います」
「今すぐ許可を下ろしたいのは山々なんやけど切り札やから迂闊には下ろせへんねんなー。……てなわけで。まずやるべきことは」

「「犯人確保へ向け全戦力で出動する!!!」」

狭い廊下に突風が吹き荒れる。
男性職員は後ろに吹っ飛んだ。
二人が室内を高速飛翔で駆け抜け、管制室へと一直線。風圧で備品が壊れたり窓が割れたりと洒落にならないことも起こったが激情に駆られた二人にはまるで目に入らなかった。

「あ゛ーーっっ！　うちの可愛い可愛いシャマルになにをさらしとるんやあの野郎は！　尋問なんて生ぬるいこと言ってる場合やなかったわ！　シャマルの乳を揉んでええのは私だけやぞ!!!」
「このままじゃ被害が広がるのは目に見えてる！　もしかしてまたフェイトちゃんの所へ向かう可能性も！　今度こそあの人の頭を冷やしまくって改心（物理）させないと！」

隊を束ねる部隊長が自ら現場へ急行するという愚行とも取れる作戦行動。だが誰も咎めるものはいなかった。放送を聞かされた皆はそれどころではなかったから。
部隊長から『戦闘可能な隊員は現場に急行、非戦闘員は直ちに退避』という雑な指令を下されスターズ分隊（ティアナ・スバル）、ライトニング分隊（エリオ・キャロ）も動揺しながらも出動へ。

「て、ティア！　初めての実戦がこれなんて大丈夫かな？　噂が本当なら犯人はフェイトさんを倒したって聞いたけど……うぅ」
「怖気付いたって仕方ないでしょ、バカスバル！　どれだけ強い相手だろうと私たち管理局員は悪に屈してはならないのよ！　あ、あんなゲスな放送をするような男ならなおさらね！」

「エリオ君、大丈夫？　前屈みになってるけど」
「だ、大丈夫だよキャロ。持病の癪がちょっと…」

管理局の誇りを持つ少女達。
思春期特有の煩悩と戦う少年。
彼女達も命令通り管制室へと走る。
だがそこには想像だにしない出来事に巻き込まれてしまう運命待っていた。

☆

「ふぅ。とてもえがったえがった。シャマル先生、素晴らしい時間をありがとう」
「……」
「ほらほら、いくらシャマル先生も気持ちよかったからって返事くらいしないとダメだよ？　また温度計挟む？」
「……は、はい。ご満足いただけてシャマルはとても嬉しいです」

よく言えましたー。撫でる代わりにムニュンと大きなメロンを形が変わるくらい鷲掴みにしてあげた。
ひあん！と可愛らしい声をあげた彼女に満足して管制室の出口へと目をやる。
調子こいてシャマル先生の痴態を放送してしまったが迂闊すぎただろうか？　今頃鬼の顔をしたなのはさんが向かって来てる頃だろう。あのビームはトラウマもんだ。二度と食らいたくない……。
「でも己の欲求には抗えないからしょうがないね！　後悔はない！」
【感度上昇…???】を利用してみたけど想像以上の結果であった。影響をモロに受けたシャマル先生がエロエロになるわ、管制室の中で作業していた女性局員達に至ってはお尻と胸を一揉みしただけでトリッ

プしてしまい、ビクンビクンと痙攣しながら倒れ伏してしまった。とりあえず下着だけ回収して寝かせておいた。
どうやら潜在魔力資質の高い人ほど『耐性』が高まるらしい。それでもシャマル先生はこのザマだが。
ちなみに管制放送を流したのは完全に趣味です。

「さて、そろそろ尻尾をまいて逃げるか！　あんまり調子こいてたらまた酷い目に遭いかねないしな！」
「ふーん。どこに逃げるつもりなん？」
「そうだなー。少し騒ぎすぎたし地球にでも潜伏しようかな？　ぐへへ。成長したアリサやすずかあたりを手篭めにしてヒモにでもなるとしよう！」
「君はなんで地球の二人のことを知ってるの？」
「そりゃあ、二人はサブとはいえ――――おろ？」

バチン。と両手両足にリング型や拘束魔法が掛けられた。すごく重いです。ＳＳＳではなかったら振りほどくのは骨だろうなー。
どうやら美少女二人がいつの間にか俺の独り言に参加していたらしい。高町なのは・八神はやてが闘争心を漲らせた瞳で見つめてくる。管制室の出口を塞ぐように仁王立ちしており、ただ走って逃げるのは難しそうだ。

「聞いても無駄かもしれんけど尋ねておくわ。どうやってあそこから脱出したん？」
「うんにゃ。別に難しいことなんてしてないよ。暫くは絶望して再転生狙おうかと思ってたけど突然力が戻ったからさ。ゴリ押しで出てきたんだよ」
「魔力どころかリンカーコアもなかったのに何故復活出来たの!?」
「そこまで説明する義理はないなー。質問ばかりでうんざりしてきたし、二人がそのおっぱいで自分からご奉仕してくれたら話してもいいよ」

脱出したらシャマル先生が立っていたので。
奇襲→時間結界→感度上昇→もみもみ。
シャマル先生がふにゃふにゃになったので一人でスマホを取り返しに行き、その際管制室の扉を見かけたので例のイタズラを思い立ったのだ。
どうやらバッテリーを充電してくれて、レンタルアプリが再開されたようだ。もしスマホをもっと警戒されていたら終わってたかもしれない。
これからはバッテリーにだけは気をつけよう。

「シャマル……酷い目に遭わせてしもうたな。あとでキチンと謝らないとあかんな」

全裸で牛乳（意味深）まみれになっているシャマル先生の恥ずかしいところを隠すように上着を被せるはやて。文字通りぬるぬるのドロドロになっていてエロかったので目の保養になっていたのだが、隠されてしまってはもうここに用はない。
手足の拘束魔法を【破壊】でチリして、窓に向かってテクテクと歩いていく。

「と、止まりなさい！　それ以上動けば、また撃ちますよ!?　レイジングハート！」
「これは脅しやないで……君を野放しておくのは危険とわかった以上、容赦はせえへん。ブラスター2！」

桜色のエネルギーが杖の先端にどんどん収束され、デカくなる。まーたさっきの馬鹿魔力で砲撃をかますつもりだろう。今度は管制室ごとぶっ飛ばす気か？
はやての方もなのはさん以上の魔力が本に集まっていくのをビリビリと肌で感じるし、凍結魔法でも使う気らしく空気が凍りそうなほ

ど室温が低下していってる。
君らは加減というものを知らんのか？
いくらリミッター付きとは言え、この広域殲滅魔法と大規模直射砲撃魔法の二つを受けるのは嫌だなー。というわけで、正当防衛してから帰るとしよう。

「ま、一秒あれば十分かな？」
「……なにが十分なんや？」
「君らを倒すのに一秒あれば十分ってこと」
「ほう。だったら実力を見せてみぃーー！」
「舐めないで！　ディバイン・――」

おもむろに俺は片手を振り上げた。
そしてどこかのマジシャンのように、『パチンッ』と大きく指を鳴らす。
世紀のイリュージョンのお披露目だ。

「――バスターあああ！……え？　出な、い？」
「わ、私の魔法プログラムも霧散した!?」

なんでや!?と叫びながらはやて達は魔法を再び行使しようと魔法陣を展開するが、やはり刻まれた術式もデバイスのプログラムコードも途中で【分解】されたかのように消え失せていく。

「強度のＡＭＦ（魔力結合分解領域）か!?」
「残念、ハズレだよはやて。ていうかフェイトちゃんの報告から聞いてなかったのかなぁ？　俺が魔法で編まれたら防護服を【分解】したって話」
「でもそれは弾丸が直撃しないと効果は出ないはず……！」

「それは見栄えがよくてカッコいいからそうしただけで、やろうと思えばこんな風に【結界＋分解】みたいなことが出来るんだよ」

この管制室という領域内に張られ【分解結界】に彼女達から踏み込んだ時点で俺の勝ちは決まっていたのだ。ここでは俺には分解する選択権があり、彼女達の魔力ソースを根元から分解してやったのさ。だから魔法が使えない。

「そんな都合のいいこと出来るわけないやろ!?」
「結界の気配さえ感じ取れなかった……！　こんなのありえないよ！」
「二人とも目の前の現実は直視すべきだぜ？」

残されたのは簡単な魔法も使えない美少女魔導師が二人。そして目の前の最強のレンタルチート持ちの俺。二人の明晰な頭脳はすでに答えなど出てるはずだ。この絶望的な状況を打破する術はない、と。

さっき素直に俺を窓から逃してくれたらよかったものを。そうすればこの場は助かったというのに。

――さあ、お仕置きの時間だ！

「やあ!?　服が溶けて……！　んんっ！」
「うぅ！　ごめんな、なのはちゃん。私の判断ミスや……迂闊に敵の蜘蛛の巣にはまってしもうた」

高町なのはの代名詞と言ってもいい白の防護服が無残にも溶け崩されて、その白い肌の肢体が露わになっていく。出るところはしっかり出ている大きく実った二つの果実がぷるんと張りのある震え方をしてくれて……感無量です。

「おっぱい！　おっぱい！　おっぱい！」

「……っ。見たければ見ればいいじゃないですか！　私は、私はこんなことでは負けません！」

せめてもの抵抗なのか、大事なところが見えないように内股をギュッと閉めて床に女の子座りになる。自分の胸も抱きしめるようにして隠してはいるが逆に胸を強調してるようでエロさが増している。

瞳が羞恥から涙で滲んで見えるが、それでも俺を見上げるように精一杯睨んでいるのもポイントが高い。その不屈の意志を汚したい衝動に駆られそうになる。

「はやてのスレンダー体型も健康的なエロさ！　普段の胸を揉む立場から揉まれる立場になったのはどんな気分かなー？　もみもみ」

「や、やめっ……！　私は女の子の胸をこんな乱暴に揉まへんよ！」

「でも実ははやても楽しんでるだろう？　ほら、ここがこんなになってるし！」

「!?　〜〜っ！」

はやての後ろから右手で胸を揉みしだく、揉まれなれてないようなのでしっかりほぐしてあげよう。フリーの左手は……内緒！

ふう、と耳に吐息を掛けてみたり、舌で舐めてみたりすると面白いように反応してくれていじりがいがある。真っ赤に染まった頬が普段の彼女から想像もできないエロさだ。

「お願い……それ以上はやてちゃんに触らないで！　わ、私が代わりになるから！」

「なのはちゃん……あかん。私の責任なんやから私が全部受け持つよ」

なんだか美しい友情が目の前で展開されてます。

ここがＲ１８ならばこのまま二人とも仲良く口では言えないとん

でもないことになっていたのは想像に難くないのだが、あいにくそうではないので。

「しかしここで据え膳食わぬは男の恥！　――というわけで、カモン【触手くん】！」
「「え゛？」」

二人の顔が驚愕に染まった。
そして数秒後、絶望の表情に変わることになる。

※管制放送が流されています※

『にゃあああああああああ!?　なにこれ、なにこれぇ!?　ぬるぬるするよぉ!?』
『めっちゃヌルってしとる!?　触手って、エロ漫画かぃ!?　なんでもアリやなホンマに！』
『』
（なのは達の身体中にへばりつく音）
『ひっ、胸の谷間に入り込んで変な動きしてくるよ……！　なんだがエッチだよこの触手さん!?』
『先っぽからなんか変なの染み出てるし、ナマコの仲間かいなコレ！　――ひっ！　そこはあかんよ！　そこだけは……ふぁん!?』
『はやてちゃ――あ、ああ……この動きってもしかして……！』
『』
（触手の動きが激しくなる音。ねちゃやねちゃやとした粘液の音も）
『みんな……！　管制室には、んんっ！　あんっ！　来ちゃダメ！　これは、命令です！　今すぐ『地上本部』へ逃げて！』
『みんな、なのはちゃんの言う通りにするんや！　対策なしじゃこい

?には絶対に勝てへん！　一旦退いて体制を――やあん！」
『??????????????』
（触手が膨らみ、何かがドパドパ吐き出される音）
『いやあああああああああああ！』
※管制放送が途絶えました※

☆

「……あの、ティア。もう管制室の前まで来ちゃったんだけど。これどうしよう」
「どうしようって……隊長達が危険な状況にいるのは明白なんだから助けに行くしかないじゃない。行きたくないけど（ボソ…」
「命令では逃げろ、って言ってましたが……」
「でもエリオくん。私たちにも何か出来ることがあるかもしれないし、フェイトさんに酷いことした人を野放しには出来ないよ！」
「それはそうなんだけど……、出来ればキャロだけは連れて行きたくないんだよね」
「……？」

ゴクリと喉を鳴らしながら四人を代表してティアナが管制室の扉に手をかける。
果たしてこの先に待っている脅威にたかが新人の自分達が対抗できるのか？
相手はリミッターが付いてたとは言えSオーバーの管理局最高峰の魔導師達を纏めて辱めるほどの実力者だ。
やはり命令通りに逃げるべきではないだろうか？

（でも、脅威から逃げて逃げて逃げ回っていたら何のためにこの機動六課に入ったのかわからなくなる！　ランスターの弾丸は止まらないんだ！）

心の中で決意を固め、扉を開け放つ。

フォワードメンバー四人全員が同時に武器を構える。そして扉の奥から迫ってくるであろう『敵性存在』に警告を発する。

「機動六課、フォワード部隊現着！　隊長！　お怪我はありま、せ……んか？」

「な、なのはさーーーん!?」

「ぐっ!?　持病の癪が！」

「？」

「て、ティアナ。みんな。見ないでぇ……！」

「貞操が無事だっただけ助かったと思おうか。でもあの変態だけは絶対許さへんよ……！」

管制室の中は言葉で詳細を語るのも躊躇うほどであり。

ぬるぬるで、ねちょねちょで、どろどろで。

高町なのは・八神はやて・シャマルも同様に酷い有様であった。

犯人がすでに現場から逃走しててよかった。

ティアナとスバルは心の底から安堵して、エリオは前屈みなった。

三話・暴走列車の中でＴｏＬＯＶＥる発生（前編）

☆

「任務は二つ！　ガジェットを一機も車両外へ逃がさず全機破壊すること。そしてレリックの安全を確保すること。『スターズ』『ライトニング』は二人ずつ車両前後から乗り込み中央車両へと向かってください！」

「「「はい！」」」

ふわふわと機内で浮いている小さな女の子？から命令が下った。ともすると上司であることを忘れてしまいそうな、小さな妖精の正体は上司『リインフォース・ツヴァイ』。彼女が部隊に指示、及び任務中の管制を務めることになった。

『小さい上司』と機動六課で親しまれているがその能力は本物で各種基本的な魔法は勿論、真価は騎士との融合によって飛躍的な能力向上が可能なのである。

今回の機動六課の任務は『時速７０ｋｍで暴走するリニア内の侵入。重要貸物庫にあるとされる『レリック』の捜索・確保。そして敵性存在の『ガジェット』の破壊だ。

ファーストアラート。

これが今回のフォワードメンバー四人の任務。

「私も現場に降り立って指揮をしますからねー。みなさんも肩の力をいれすぎないように、なのはさん達との訓練を思い出して頑張りましょう！」

のほほーん、とやや気の抜けた可愛い声でリインは目の前の新人達の緊張を解こうとする。今回の任務は隊長である『高町なのは』『フェイト・Ｔ・ハラオウン』の両名はリニアに向かってきている敵の航空戦力を削る為不在となる。

――リインがしっかりしなければ、です！
彼女はぐっと握りこぶしを作り、強い決意でこの任務に臨む。その可愛らしい想いがレンタルチート野郎に踏みにじられるまであと１０分。

『ティアナ！　どうですか!?』
「だめです！　ケーブルの破壊、効果なし！」
『了解！　ティアナはスバルと合流をしてください！　車両の停止はリインが担当します！』
「了解！」

――ガタンゴトン、ガタンゴトン。
揺れるリニアの車両内でティアナは安堵のため息を吐いた。緊張の糸が緩んだわけではないが、ここに至るまでのガジェットとの戦いで自分の力に確かな手応えを感じていた。
己の愛機は銃型デバイス『クロスミラージュ』として生まれ変わり、性能が大きく向上したこともあって『自信』を手にしつつある。

「あんたみたいな優秀な子に頼りすぎると私的に良くないんだけど、実戦では助かるわ」
【Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ】

柔らかい笑顔で愛機を褒めて、さらに気を引き締めて任務を続行する。

（初めての実戦だから浮ついてたけどガジェットは単騎なら大した強さじゃない。訓練通りの力を発揮できれば私でも十分戦える！）

立ちはだかるガジェット達を打破し、ティアナは車両を次々と踏破していく。
そして遂にガジェットがあるとされている第七車両までたどり着いた。
そこにもレリックを狙ってガジェット達が飛び込んできたが、いまのティアナの集中力ならば2～3機の群れであっても遅れは取らない。

「これで、終わりよっ！」

車両内で確認した最後のガジェットを弾丸で打ち砕き、粉々に砕け散ったのを確認して小さく拳を握る。これであとはレリックを収納しているケースを確保すれば任務達成……、だがティアナの胸中には嫌な予感が漂っていた。
スバルと未だ合流出来ていないのである。調子に乗って先行しているのかと思いティアナもそれなりに急いで向かって来たがスバルの気配を一切感じない。スバルの派手な戦闘スタイルなら戦闘音の一つもしていいはずなのに。

「管制のリイン曹長。こちらティアナ。第七車両内のガジェットは殲滅しました。ですがスバルと連絡が取れません。そちらからコンタクトは取れませんか？」
【……】
「……こっちもダメか。確かにガジェットのＡＭＦの影響もあるんだろうけど、かなり減らしたはずなのに」
ＡＭＦ対策に持たされていた緊急用の無線信号コードなどを利用しても応答がない。
（まさか、孤立させられた？）

さっきまで上手くいっていただけに警戒が緩んでいた。耳を澄ませて周囲を探るも車両内は静かで物音一つしない、不自然なほどの静寂。

額から嫌な汗が滲み出てくる。

心臓の鼓動が高まり早鐘を打つ。

（どうする！　このまま天井を突き破ってリニアの屋上へ飛び出る!?　でもまだレリックを確保していない！　せめてレリックを見つけてからでないとみんなの頑張りが無駄に！）

どうする？　どうすればいい？

どうすべきか脳をフル回転させながらも、ティアナの身体は無意識に動いていた。考える時間さえ惜しいと言わんばかりに、車内を駆け抜けレリックの捜索に入る。

任務達成目前で手ぶらで逃げ出すなどティアナの誇りが許さなかったのだ。

【こ、……管、制……代】

「！　リイン曹長ですか!?　よかった繋がった」

【こ、れ……、リイ、……曹、の】

「現在レリックを捜索中です！　通信が不安定ですが回復してきたようで安心しました！　私よりスバル達のサポートをお願――」

【これより！　俺がリイン曹長の代理で管制を務めます！　フォワードメンバーの皆様はご静聴くださーい！】

「　」

【リイン曹長が俺の手の中で可愛らしく暴れております！　とっても愛らしいです！】

考え得る最悪のパターンを引いてしまった。

聞き覚えがありすぎる声と、身に覚えがありすぎるシチュエーションにティアナの思考は完全に停止した。
そんなティアナを横に置いておくように自称管制代理の放送が続く。

※管制念話が流れています※

『は、早く私を解放した方が身のためなのですよ!?　私にエッチなことをしたらはやてちゃん達が黙っていませんっ！』
『へー。じゃあこんな風にリインちゃんにエッチなことをしたら、はやて達まで来てくれるのかー。好都合だなー』
『ひ、ひあああん!?　服が溶けて!?　はやてちゃん助けてくださーい!!』
『フィギュアみたいで可愛い～。肌もぷにぷにして柔らかいし、このまま攫って部屋に飾りたいくらいだ』
『なんかとんでもないこと言ってますよー!?　私はフィギュアさんではないのでご期待に添えないと思います！』

『おっぱいぷにぷに～』
『ふにゃ!?』
『お腹さわさわ～』
『そ、そのエッチな指使い、やめ……やあん！』
『お尻むにむに～』
『ふあっ……！　ゴシゴシしないでぇ……』
『最後にここを擦ってあげるね』
『!?　そ、そこは――――あ、』

??????????????????????????
『』
（子供には聞かせられないリインの鳴き声）
『とろとろになっちゃったねえ、リインちゃん♡』
『あぁ、ひっく……もう、許して……ぇ』
『ところで俺のバルディッシュを見てくれ。こいつをどう思う？』
『すごく……大きいです』
『リインちゃんとどっちが大きいか比べてみようかな！　我慢できずにサンダー・レイジが暴発してしまうかもしれないけどそれは事故だよね!?』
『ま、待ってください。そんなの近づけないで！　お、お慈悲をくださいお願いですからぁ！』
??????????????????????
『ム・リ♡』
『はやてちゃあああああああああん！』
『』
（リインの悲鳴と何かが擦られてるような音）
（サンダー・レイジ！が暴発した様子）

※管制念話が途切れました※

「……どうしよ」

なんか、自分の知らぬ間にえらいことになっていた。怒りや呆れや羞恥より先に絶望感が襲いかかってくる。もはや任務続行など出来るとは思えない。管制は掌握され、仲間達の安否も不明。この車両にレリックがあるとしても、今は探す時間すら惜しい。
『あいつ』がここに来ていると考えると思わず身震いしてしまう。
彼の今までの行動を考えると、その魔の手はリイン曹長だけで満足す

るとはまるで思えないからだ。

「スバル。キャロ。エリオ……は、男の子だから大丈夫か。この調子じゃなのはさん達もどうなってるか」

先に隊長達を片付けてからこの列車に乗ってきた可能性さえ考えられる。それだけの『力』を持っている。あの変態は。

今すぐここから離脱するべき。しかしティアナの足は縫い付けられたように動かなかった。親友を、スバルを置いて一人でここから逃げることに強い拒否感があるのだ。

そしてそれが致命的な隙となってしまった。

「スバル……あんたいまどこに」

「残念。スバルはもうリインちゃんより先に堕としてるよん」

「――――なっ、！」

聞き覚えのある男の声に振り向いた瞬間、ティアナの胸に弾丸が撃ち込まれた。

その衝撃で髪紐が取れツインテールが解けてしまう。

「さーて。スバルっぱいとティアナっぱいの揉み比べてを始めるとしようか！」

☆

「おっ。今日のティアナのバリアジャケットはノーブラ仕様なのかー。おっぱい柔らかすぎて何事かとおもったぞ？」

「あんたが私のブラを剥ぎ取ったからでしょ!?　雑にポケットにしま

いこんでんじゃないわよ！」
「テへへ、そうだったそうだった。もみもみ」
「この変態！　揉むの……くっ、やめなさいよぉ」

むにゅん。むにゅむにゅ。
そんなこと言われたって俺の意思で揉んでいるのではない。ティアナのおっぱいが俺の手のひらにフィットする大きさで、吸い付くような柔らかさをしてるのが悪いのだ。だからこのまま一日中ティアっぱいを揉みしだいても罪にはならないと思います。
揉む度にティアナの頬が林檎のように染まる様は眺めているだけで情欲が沸き立ちます！

「身体に力が入んない……！　あんた、私になにを撃ち込んだのよ!?」
「んー？　【弛緩】を込めた弾丸をちょろっとね。だからこうやって俺が後ろから支えてやらないと立つのも難しいでしょう？」
「ついでのように胸を揉みしだくなって言ってんのよ！　あとお尻になんか固いのが当たってるんだけど!?」
「当ててんのよ」

足から力が抜けて膝を地面に落とすほど弱っているティアナを支えてやる――報酬として揉ませてもらってるのだ。ついで、なんていい加減な気持ちではないぞ。お尻に当たってるのは気にしないでくれ。
ノーブラとはいえ、ブラウス越しなのにとても柔らかいティアナのおっぱいをムニュムニュとシゴくようにその感触を味わう。実った果実は想像以上にボリュームがあり、ティアナは着痩せするタイプだと判明。これは3～4年後もさらに大きくなると予想する。
「そこのスバルみたいに挟んでもらおうと思ったけど将来もっと巨乳になるまで楽しみに待っておくとしようかな、っと♡」
「ひぐぅ!?　す、スバルぅ……！」

「ふあ、ティアぁ……私もうダメ、かも」
「気をしっかり持ちなさい！　こんな奴に屈したらダ……あっ、ふあ!?　先っぽをコリコリするなぁ！」

ティアナの可愛いイチゴを指で挟んだり弾いたりして遊びながら、その目の前で大量の白濁ローションをぶっかけられたような惨状の真っ只中にいるスバルを目の保養にしてみる。
【触手くん】達に囚われたスバルはその肢体を隅々にまでウネウネでネチョネチョでドロドロの触手にへばりつかれ、蕩けきったような瞳を晒している。瞳の中が『??』になっとる『??』に。

「やめて。やめてよ触手さん……！　私の胸に入り込まないでぇ。ふあ!?　そ、そこはもっとダメだからぁ！」
「うねうねうね――どぱっ！」
「んんっー！　この白いぬるぬる、やだぁ！」

触手達はスバルのメロンとメロンの間、健康的な脇の下、引き締まっている太ももへと重点的に絡みつき意味深な上下運動をしている。せめてもの抵抗でお股をギュッと閉じてはいるが、その牙城が崩れるのも時間の問題だろう。
さらにナマコのような触手達はさっきから断続的に大きく膨らみ、あるものを気持ち良さそうにスバルの顔や胸に向かって吐き出し続けてる。なにをって？　やだなー、ケフィア以外ないじゃないですか！　本当ですよ！

「そしてこの触手くんの最も良いところは、俺の一部と感覚神経が同期されているというところなのです。うっ、ふう……」
「あんたさらっと恐ろしいこと言わなかった!?　今すぐスバルの身体に纏わりついてるキモ生物をどけなさいよ！」
「いまどけたら触手くん達はティアナに襲いかかるけど、スバルみたいな目に遭いたい趣味でもあんの？」

「あってたまるもんですか！　これ以上親友を辱められるくらいなら私が代わりになった方がずっとマシだって言ってんのよ！　このド変態野郎！」
「な、なんて口の減らないやつだ。しかしその強気がまた良い！　こうなったら二人まとめて触手くんの餌食になってもらうか！」
「だからスバルにはやめなさいよーっっ！」

スマホ画面をさらにポチッと押して追加レンタルする。地面に光が灯り、刻まれた魔法陣からぬるりと触手くん達が這い出てきた。苦虫を噛んだかのようなティアナの表情が歪む。嫌でもこれから起こる未来を想起してしまうので仕方ない。
ほーい、と有無を言わせる暇も与えずにティアナをスバルの横へ放り投げた。

「許さないから！　あんただけは絶対に！　いつか必ずこの手で監獄にぶち込んでやるからね！」
「その手の捨て台詞はここ数日で何回も聞いたな」

※敗北シーンを音声のみでお送りします※
「ひっ!?　キモいキモい気持ち悪い！　なんなのこの触手達!?」
『??』
（ティアナの肢体にぶちゅぶちゅとへばりつく音）
「ふ、服の中に入ってくるなぁ！　ぬるぬるして気持ち悪いのよホントに……んあ!?」
『』
（ブラウスとパンツの中に侵入する触手達）
「そこだけはやめ……むぐぅ!?」

???
?????????????????????????

「ティアぁ。私、もう……ふぐぅ！」
『』
（ティアナとスバルの口いっぱいに触手くんの先っぽがズボズボする音）
「ぶっ、んぐっ！　ちゅぶっ！」
「あぅ……ひぐっ。ぐちゅっ！」
『』
（触手が何かを大量に吐き出す音）
「～～～っ!?」
「ふう……ＲＥＣ！　ＲＥＣ！」
（変態が動画を撮りまくる音）
『』
（まだまだ触手達が吐き出しまくる音）

※音声は途切れました※

☆

「これがレリックかー。確かロストロギアで下手すると大爆発を起こす危険物なんだっけ？」
白濁ローションの海の真ん中でドロドロのネバネバになって気絶しているティアナとスバルを尻目に、レリックを保管してるケースを発見する。
レリックに関してはかなりうろ覚えの知識なので信用度は薄いが、『ルーテシアの母親を蘇生』『聖王ヴィヴィオ』などなどのフラグの為に必要になってた気がする。ただハズレも多く、本来このレリックは

機動六課が回収してたはずなので俺がこれをパクっても本編には影響しない気がする。

「でもこんなの俺が持ってたところでなー。スカさんか三脳あたりに高く売りつけてやろうか。はやてとエッチなこと引き換えに取り引きするというも悪くないな！」

せっかくゲットしたのに捨てるのも勿体無いので頂くとしよう。もしかしたら何かの役に立つかも。

「そうだ！　役に立つといえば『ジュエルシード』もここにあるんだよな。確かエリオ達と戦ってる新型ガジェットの中に入っていたはず」

あれも何かに使えるのではないのだろうか？

個人的にはこの『レンタルアプリ』より優れてるとは全く思わないが、一ファンとして生でジュエルシードを見たいという好奇心が疼く。あとついでにキャロにエロいこともしておきたいので。

「子供だからってセクハラから逃れられると思ったかな？　１０才の子供も守備範囲内です！」

我ながら下衆だなー、と軽く自己嫌悪しながら歩き始める。

ティアナ達は放っておいても大丈夫だろう。すぐなのはさん達が回収に来るはず。リインちゃんもこの車両内に寝かせてあるし、置いていかれることはまずないだろう。

ここがＲ１８でなくてよかったな。

もしそうだったら全員悪い人に拉致される頃ですよ！

「それじゃあ、行くかっ！　――充電してから！」